

『名ばかりの教育』

～おざなりの教授についての考え～

いったいどれだけの教師が、
その名に値するのか？

ほとんどは単に出席を取り、
答案を採点し、
文法の誤りを直し、そして
生徒の意見を聞くだけの存在になってはいないだろうか？

演ずることを知らない無能な役者のように教壇に立つ
なぜ、教師は退屈なひどい芸能人か、
さもなければ、
自身の方針を貫けないふがない大臣のようなのであろうか？

どれだけの学生が真の教師に出会うのか？
彼らから何が学べると期待できるだろうか？

悟: ほとんどの教師は理想を持って教え始めるのですが、最後にはシニカルになってしまいます。

玲亜: 多くの教師があまり考えることなく、まるでロボットのように熱意もなく型どおりの授業をするだけになってしまうのは、危険なことなのかもしれません。

ミン: どれほどの社会制度が、本来の目標とは正反対になっていることか。それが不思議です。例えば、刑務所は犯罪者を訓練し、軍は平和でなく、戦争を助長しています。それに、学校は知性を養うのではなく、人間をより愚かにしていることが多いのです。

ティム: それにはオーウェル風の「曖昧な話」のような巧妙さがあると言いたくなります。各制度は隠された構造によって、影を作り出しています。

- T Newfields (和訳: 吉田典子と槌谷メリッサ)

開始: 1999年 桃園市 完成: 2023年 横浜市